# 審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

中村麻由子の「教師が子どもを見るということ―共感的・ケアリング的なまなざしの実践的意味―」は、教育実践において教師が子どもを見るということがもつ意味の奥行きを共感的・ケアリング的なまなざしという視点から明らかにした論文である。中村は、多様な教育実践の場への臨床的関与の経験のなかで、教育実践において教師が子どもをいかに見るかということが重要な契機になることを自覚すると同時に、新自由主義的な政策と新能力主義的な言説が浸透する現代の教育状況のなかで、教師の共感的・ケアリング的なまなざしがもつ意味が見失われつつあることを問題視している。こうした問題意識のもとに、本研究において中村は、まなざしの諸特徴や諸作用を理論的･実践的に掘り下げることをとおして、教育実践をまなざしを媒介にしてたえず社会的に構成され、再構成されるプロセスと見なす研究の枠組みを提起している。三部構成のうち第Ⅰ部では長期にわたる教師と子どもの一対一の関係におけるまなざしの練り直しの過程を、第Ⅱ部では教師が子どもに向けるまなざしがもつ文化的・政治的な意味の奥行きを、第Ⅲ部では現実の学校教育の制度の内側における共感的・ケアリング的なまなざしを土台にした学校文化の再編の可能性を問題にしている。従来、ともすれば経験的ないし部分的にしか語られることのなかった教師が子どもを見るということの意味を、まなざしという概念を用いて包括的に捉え直す本研究の目的は独創的であると同時に、現代の教育状況におけるアクチュアルな課題に応える意義をもっている。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究において中村は、教育実践への臨床的関与を土台としながら、理論研究の検討と実践事例の検討を交える方法論をとっており、三部構成のいずれのパートにおいても理論研究と事例研究の双方から問題に迫る論述の様式を具えている。また、そこでの実践事例の検討においては、教師のまなざしを媒介にした教育実践の生成過程を捉えるうえで、多様な出来事の意味連関を見出してゆくために物語的探求の方法をとっている。臨床的関与と理論研究の検討と実践事例の検討の三つの動的連関を意識するその方法論は、教育の臨床的研究を発展させるうえで重要な意味をもつものであり、そこで採用された物語的探求の方法はまなざしを媒介にした教育実践の社会的構成を問題にする本研究の主題にふさわしいものになっている。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

理論研究の検討においては、教育への臨床的関与の経験を土台にしながら、そこで生起する出来事と響き合う文献資料を内外の幅広い分野から収集し、それらのあいだに緊密な連関をつくりだしている。実践事例の検討においては、教師自身の書いた実践記述および教育への臨床的関与の経験のなかで見いだされた豊富な事例が、まなざしという視点から再構成された物語的記述をもとに分析されている。理論研究の検討で見いだされた知見と実践事例の検討で見いだされた知見の二つの角度が、ある部分では共通の問題を浮かび上がらせ、ある部分では異なる側面を照らし出すことによって、教師が子どもを見るということの実践的な意味の奥行きが

ゆたかに示されるものになっている。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

各部の理論研究の検討および実践事例の検討に関する考察は明確である共に示唆に富み、中村の教育実践への臨床的関与の経験の土台を感じさせるものである。

教師が子どもを見るということは、その場での教師の知覚の問題にとどまるものではなく、それぞれの子どもに対する長い時間をかけた見方の形成を土台とするものであり、そこに生起する出来事はその子どもとの一対一の関係の生成、教室における子どもたちの関係の生成、教師の実践的思考の過程、またそれらを支える同僚教師や臨床研究者との関係といった教育実践を構成する多様な諸局面と複雑に絡み合っていることを示したことは、教職の専門性の中核にこの問題を位置づける意義をもっている。

また、ともすれば教師と子どもの心理学的な関係に限定して捉えられがちだった教師が子どもを見るということの意味を文化的・政治的な次元に位置づけ直す第Ⅱ部の考察は、当該分野の研究の発展に大きく寄与するものになっている。クリティカル・ペダゴジーとナラティヴ・セラピーという、これまで異なる領域にあった二つの理論をつなぎながら、それらのあいだに共通する現代社会における支配的なまなざしの問題点の指摘とそれに対抗する実践の提起を見いだすと同時に、それを日本における教育実践の具体的な局面と結びつける議論の学術的な意義は大きい。

さらに、支配的なまなざしに対抗する教育実践の文化の再編の問題を、一部の有能な教師の力量の問題にせず、それが現実の学校教育の実践の諸局面で可能になる具体的な手がかりを多角的に示した考察は、現実の教育実践に応えようとする筆者の研究姿勢をよく示している。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

以上の諸点から、教育学博士の学位取得にふさわしい意義や成果が充分に評価できるものと判断する。